

一〇 朝鮮で學習せられた外國語

朝鮮は古來大國の間に介在して居たので、之が應酬交渉のため各種の言語を學習せねばならなかつた。即ち古くは支那語、蒙古語、日本語、女眞語、契丹語、回鶻語、滿洲語、近くは支那語、日本語等の外、西洋の重なる言語が學習せられたのである。今其等の學の大略を次に述べようと思ふ。

支那語

(一) 支那語(漢學) 朝鮮に於て最も早く學習せられた外國語は、恐らくは支那語であつたらう。公に語學機關が設けられたものに、弓裔泰封の時に史臺なるものがあつたが、果して如何なる語學を研究したか不明である。然るに高麗忠烈王の時に至り通文館なるものが設けられ、始めて漢語を習ふことになつた。其の他當時漢語都監(後漢文都監と改む)なるものあり、教授官を置いたといふ記事があるから、此の學は可なり盛況を來したと思はれる。李氏朝鮮に至りては、太祖二年に司譯院なるもの設けられ、主として漢學(支那語)を學習せしめたが、漸次蒙學、倭

學、女眞學の三學を加へ、「經國大典」同院の制度には上述の四學を含むことに明記せられ、爾後其の内容に於て多少の變更はあつたが、最近に至るまで略以前の形式を踏襲して居た。

司譯院の職員としては院内に都提調、提調等の外、支那語學に關するものとしては漢學教授、漢學訓導あり、地方には各地に譯學訓導なるものあり、京郷ともに若干名づつの漢學生徒を收容教育した。譯學官採用の試験には漢城試(京城にて)、郷試(地方にて)の兩種あり、講書の試験としては、「經國大典」に初試、覆試とも、四書文臨、老乞大、朴通事、直解小學背講と規定し、尙ほ覆試には「願講五經小徵通鑑宋元節要者聽臨文」と附記してある。此等諸書の中には今日内容の不明なものもあるが、「老乞大」「朴通事」の二書は世宗の初頃に其の名現はれ、後世までも用ひられて居る。「直解小學」は俚長壽の著にかゝり、支那音で説明したため一時は非常の名聲を博したが、前二書の語學的に編纂せられたのに比し遜色があつたため、後世に至り「五倫全備」を以て代へられるやうになつた。而して「五倫全備」は「續大典」頃まで使用せられて居たが、「大典會通」以後更に「譯語類解」を以て代へられた。

司譯院所屬の譯官以外、尙ほ幾多支那語學に關係せる役人が居たが、その事は餘り枝葉に亘るから説明を省略する。

斯の如くにして推移し來つた歴史ある司譯院は、李太王三十一年に行はれた所謂甲午の改新によつて全然廢滅に歸した。而して語學研究の機關としては翌三十二年外國語學校を設け、其の後之を漢城外國語學校と改稱し、其の何れに於ても漢學を選擇學修せしめたが、同校は明治四十三年京城高等普通學校に併合せられ、以後支那語の學習は中絶の姿となつた。

蒙古語

(二) 蒙古語(蒙學) 高麗の元に對する關係は高宗の頃に始まり、忠烈王の時に至つて最も深く、一時は全然元の掣肘を受けざるを得なかつた。隨つて蒙古語の研究なども盛んに行はれた形跡があるが、之が學習に關する公の機關としては別に無かつたらしい。李朝太祖二年に司譯院が設けられ、漢語を教授したが、蒙古語に關することは表面上記載せられて居ない。併しながら當時同語の必要欲くべからざるものであつたことは、同三年司譯院提調僕長壽が蒙學生徒のことに就き上言して居るのを見ても明かである。蒙古語は蓋し此の頃から正式に司譯院

に於て學習せられたものであらう。一寸考へると元の滅亡したる後、朝鮮に於て蒙古語學習の必要が認められないやうにも思はれるけれども、實際に於ては必ずしも然らず、司譯院の存續せる間、蒙學なる名が依然として存して居たのである。司譯院職員中蒙學に關するものとしては、中央にも地方にも蒙學訓導なるものを置き、蒙學生徒を教育せしめた。譯學官採用の試験には漢城試、鄉試の兩種あり、寫字の試験としては經國大典に初試、覆試とも「王可汗」「守成事鑑」「御史箴」「高難」「加屯」「皇都大訓」「老乞大」「孔夫子」「帖月眞吐」「高安」「伯顏波豆」「待漏院記」「貞觀政要」「速八寶章記」「何赤厚羅」「巨里羅」の十六種を擧げて居るが、これ以前には「王可汗」より「皇都大訓」に至る六種は存しなかつた。而して中には内容の不明なものもある。

然るに其の後此等の書の多くは兵燹のために散失し、唯「守成事鑑」「御史箴」「孔夫子」「伯顏波豆」「待漏院記」の五種のみが用ひられることとなつた。其の後康熙甲子に至り、讀本用としては専ら「新編老乞大」が用ひられることとなり、又乾隆丁巳に至つては「守成事鑑」以下五種の書が何れも音義時用に適せざるの故を以て廢

せられ、「捷解蒙語」(李^世著)を以て之にかへ、「老乞大」と共に寫字用に供した。それで「續大典」には「老乞大」と「捷蒙解語」の二種のみを規定してある。然るに乾隆戊子「蒙語類解」成るに及び、之をも併用することにした。「大典會通」には明かに三種の書名が出て居る。

司譯院所屬の譯官以外、尙ほ幾多蒙古語學に關係ある役人があつたが、今は之が説明を省略する。

日本語
(三) 日本語(倭學) 司譯院に倭學の設置せられたのは太宗の頃で、其の後種々の變遷が行はれたことは本書「日本の朝鮮語學と朝鮮の日本語學」の條に於て説明して置いたから、詳細は其の條を參照せられたい。

女眞語

(四) 女眞語(女眞學) 高麗と女眞との關係は、女眞が宋と協力して遼を亡ぼした頃から始まり、睿宗が尹瓘をして女眞を討たしめたことは有名な話となつて居る。其の頃から高麗に於ては女眞語を研究したのであらうけれども、明かに史籍に記されて居るのは、高宗十二年に始めて女眞小字を學習せしめたといふ記事(高麗史)である。女眞小字とは熙宗が女眞大字(太祖が希尹に命じ)に倣つて作られ

た文字をいふのである。高麗高宗の時女眞（金國）は元の爲に滅ぼされたが、其の殘黨は高麗末より李朝の初にかけ、虚に乗じて屢々朝鮮の地に侵寇した。随つて朝鮮では尙ほ女眞語研究の必要を感じ、世宗の頃司譯院に女眞學を附設したやうに思はれる。經國大典には明かに女眞學が載せられてある。

司譯院職員中女眞學に關するものとしては、京城に女眞學訓導なるものがあったが、地方には別に確定したものが無かつた。譯學官採用試験には前述の三學と同様漢城試、郷試の二種あり、寫字の試験としては經國大典に初試、覆試とも、「千字」「天兵書」「小兒論」「三歲兒」「自侍衛」「八歲兒」「去化」「七歲兒」「仇難」「十二諸國」「貴愁」「吳子」「孫子」「太公尙書」の十四種としてある。以上の諸書は多くは兵燹のため失はれたが、「小兒論」「八歲兒」「去化」「仇難」「太公尙書」の五種は康熙年間に清語即ち滿洲語に翻譯せられ、其の或るものは今日までも傳はり、其の内容を知ることが出来る。

抑朝鮮では女眞學なる名稱と清學なる名稱とを互に混用して居たやうに思はれる。「通文館志」の如き「康熙丁未女眞學改稱清學」として清學は單に女眞學を改

稱したものゝやうに書いてあり、其の他之に類似せる例が澤山あるが、これは單に名稱の變更にあらずして、此の年に女眞學が廢せられ、清學即ち滿洲語學が新に之に代つて加へられた事實を示して居るのである。之に就いて尙ほ詳しく論證を試みたいが、餘りに岐路に入る嫌があるから、これだけに止めて置く。

契丹語

(五) 契丹語。高麗と契丹との關係は高麗の初期に始まり、高麗の成宗及び顯宗は契丹の侵寇を蒙り、之に對して和議を乞ひ、其の正朔を奉するに至つたやうなことがある。併しながら兩國の國際關係は僅かに百年に過ぎなかつたので、眞面目に契丹語を研究するやうな組織もなく、單に歷史上成宗十四年契丹語を學習せしむるため童子十人を其の國に遣したといふ記事ある位に止まつて居る。

回鶻語

(六) 回鶻語。蒙古にはもと固有の文字無く、太祖の時始めて回鶻字を用ひて蒙古語を書き表はすことにした。其の後世祖は八思巴に命じて蒙古新字を作らせたが、此の新字は不便なる点が多かつたので、廣く行はれるに至らなかつた。元から高麗に送る文書の如きも一時は此の文字によつて書かれたが、當時之を讀む者が少なく、矢張り公の文書は回鶻文字を以て書かれることが多かつたのである。李朝

に至つても多少此の文字を學習する必要があつたらしく、世宗の頃に禮曹が家學生徒をして舊新兩文字を兼習せしむべきことを啓して居る。

(七) 滿洲語清學 清の太祖は李朝宜祖の頃から漸く勢力を得、仁祖の朝に至り、朝鮮は二度まで清の太宗のために國土を蹂躪せられ、全く清の屬國となつたことがある。其の後朝鮮人は清を怨み、朋を慕ふの念に滿されて居たが、さりとて全然滿洲朝廷を眼中に置かぬ譯にも行かず、滿洲語をも相當に研究したのである。

朝鮮に於て滿洲語學即ち清學の置かれたのは、「通文館志」に「康熙丁未女眞學改稱清學」とある如く、康熙丁未即ち清聖祖六年、朝鮮では顯宗の六年に當つて居る。當時まで司譯院で學習した語學は倭、漢、蒙、女眞の四種であつたが、其の時には既に女眞の勢力が衰へたので、清學を以て女眞學に代へるやうになつたのである。「通文館志」に改稱とあるのを見ると、單に女眞學なる名稱を清學と改稱したに過ぎぬもの、即ち名は清學であるが、實際は從來の女眞學であるといふやうに思はれぬでもないが、實は女眞學を廢して清學を新設したのである。

康熙丁未以後、司譯院の清學に關するものとしては京城及び地方に訓導なる

ものがあり、夫々生徒を教育した。譯學官採用の試験には漢城試、郷試の二種あり、寫字の試験としては「續大典」以後初試覆試とも最後まで「八歳兒」「小兒論」「老乞大」「三譯總解」の四種を用ふることになつて居た。然るに「通文館志」「大典通編」等に以前には「千字文」「兵書」「小兒論」「三歳兒」「自侍衛」「八歳兒」「去化」「七歳兒」「仇難」「十二諸國」「貴愁」「吳子」「孫子」「太公尚書」の十四種を用ひたやうに記してあるが、これは半ば清學と女眞學とを混同したために起つた誤である。而して清學に關する制度は甲午の改革まで表面上存在して居たが、其の後は語學校の如き所でも之を學習することが無くなつた。

西洋各國語

(八) 西洋各國語 司譯院は甲午の改革によつて廢せられたが、之と同時に外部、參謀部、教育部、武官學校等に繙譯官なるものが置かれ、外國語繙譯の事に當ることとなつたが、其の以前即ち李太王二十四年に育英公院なるものを設け、外國語を教授せしめたことがある。其の後學校としては同太王三十二年に外國語學校を設置して日、英、法、佛、蘭、西、俄、露、西亞、漢、支那語、德、獨逸語、語を學習せしめ、後に之が漢城、外國語學校に變じて日語、英語、漢語、法語、德語を教授することとなつたが、併合

後全部廢せられてしまった。